

上杉和央 編

『軍港都市史研究Ⅱ 景観編』

清文堂出版 2012年3月 464頁 8,800円+税

前近代の都市を継承したものが多く近代日本の都市の中で、海軍の軍港が置かれることによって形成された軍港都市は、きわめてユニークな存在であり、関係諸都市の自治体史が、それぞれの都市のそうした性格について多くの頁を割いてきたことは当然である。関連する日本史学分野の研究も少なくない。一方、都市地理学・歴史地理学など地理学の分野においても、軍港都市に関するいくつかの論考が著わされている¹⁾。だが、それらの研究成果は個別の軍港都市を対象とすることが通例であり、少数とはいえ複数存在した日本の軍港都市を総合的に考察した研究は、これまでみられなかったように思われる。本書はその点、現在の日本国内にかつて存在した旧日本海軍の軍港、すなわち鎮守府の置かれた横須賀、呉、佐世保、鎮守府が置かれた時期と要港部に格下げされた時期とがある東舞鶴、一貫して要港部所在地であった大湊・田名部の計5つの軍港都市をすべてとりあげ、それらを地理学(人文地理学)の立場から、「景観」をキーワードとして論じている点で、大きな意義をもつ書物となっている。

内容の紹介に先立ち、本書が含まれるシリーズ「軍港都市史研究」について一言すると、本書はこのシリーズのⅡであり、その刊行に先だって「Ⅰ舞鶴編」(坂根嘉弘編)が2011年に刊行されている。本書の執筆者のうち数名は「舞鶴編」にも寄稿しているが、当然ながらその内容は本書掲載のものとは異なる。未刊のⅢ以下は、予告では呉編、横須賀編、佐世保編、要港部編と続き、最後のⅥとして政治・経済編が予定されている。

本書は、巻頭にシリーズ全体の刊行趣旨が掲げられた後、序章「軍港都市と景観」が置かれ、その後続く11の章は、大きく第Ⅰ部(第1章~第5章)、第Ⅱ部(第6章~第8章)、第Ⅲ部(第9章~第11章)に分けられている。第5章以外の10の章の後には、おおむねその章の内容とかかわりのある、「コラム」と称する小論文が収められている。結論的な章はないが、巻末には研究経過などを記した「あとがき」がある。

以下、本書の内容の概略を紹介するとともに、

評者の気付いた点を個別に記し、最後に全体的な読後感を述べることにする。

まず序章においては、編者の上杉が、本シリーズに「景観編」が加えられた経緯や、その執筆者がすべて地理学研究者であることについて記した上で、各章の内容について簡潔に紹介している。そして、景観という用語の意味するものについても、日本の地理学史の中で位置づけの変化をふまえて言及している。

第Ⅰ部は「軍港都市の景観変遷」としてくられ、5つの章からなる。それぞれの章のタイトルは、「地形図と空中写真からみる〇〇の景観変遷」という形で統一されるだけでなく、章ごとに執筆者が異なるにもかかわらず、章の中の節の構成や内容に可能な限り統一性を保つよう配慮されていることがうかがわれる。章の順序は、軍港としての地位や創設年次を考慮してか、横須賀、呉、佐世保、東舞鶴、大湊・田名部とされている。

第1章は花岡和聖の執筆で、横須賀の景観変遷が地形図や空中写真を用いて論述される。第Ⅰ部の他の章でも共通して用いられる、年次の異なる数種類の5万分の1地形図や敗戦直後の空中写真に加えて、1882(明治15)年の2万分の1迅速測図が用いられている点が特徴的である。ただ、紙数の制約とも推測されるが、明治前半期に横須賀についていくつも刊行された鳥瞰図風の図や、大震災直前の横須賀について利用可能な1万分の1地形図などの資料が紹介されなかったのは惜しまれる。かつて評者は、横須賀について記した小文²⁾の中で、これらの資料の一部を図版として掲げたことがあり、できれば拙稿、あるいはそうした図類そのものの存在について何らかの形で紹介していただければありがたかった。本章で高く評価したい点としては、行政上の横須賀(市制施行は1907年)には含まれていなかったものの、海軍と直接・間接にかかわる諸施設が立地していた、周辺の衣笠、浦賀、久里浜等の諸地区についても節を設け、地形図を用いて景観変遷をたどることがあげられる。

呉を対象とする第2章(村中亮夫執筆)、佐世保を対象とする第3章(山本理佳執筆)、東舞鶴を対象とする第4章(山神達也執筆)、大湊・田名部を対象とする第5章(筒井一伸執筆)においても、基本的な構成や利用資料は第1章と共通し

ており、いずれもきわめてオーソドックスに、地形図や空中写真から読み取れる軍港都市の景観変遷の跡をたどっている。周辺地域についての目配りを忘れない点も第1章と共通する。ただ、「要港部」としての地位に終始し、そのため都市的集落としての規模も他の軍港都市と比べて小さいものにとどまった大湊・田名部については、周辺部についての論述がなされていないのは、むしろ当然であろう。

一方、第1章について記した「もう少し別の資料（とりわけ地図や写真など当時の景観を描いた資料）を併せて用いていただければ」との評者の感想も、第I部の他の章、とりわけ第2章と第3章に共通する。佐世保については、序章でふれられている平岡昭利の労作（第3章にはなぜか言及がないが）に収録された多くの佐世保の古地図類から何か転載することもできたはずだし、呉についても、市史編纂事業の一環として刊行された書物の付図として、太平洋戦争期の呉の中心市街地の町並みを復原した貴重な成果図³⁾があることを知る者としては、たとえ、それを転載することが諸般の事情から困難であったとしても、せめて、そうした試みがなされていることへの言及はほしかった。

第1章から第4章までの各章の後には、それぞれ「コラム」が置かれている。第1章の後のコラム（上杉執筆）は軍隊に関する地図記号を解説したもので、戦前期の地形図を利用する機会の少ない読者にとっては、きわめて有用な内容となっている。第2章の後のコラム（同）は地形図の記号全般に関するもので、むしろ第1章の後のコラムよりも入門的な内容のように思われた。第3章の後のコラム（同）は、軍港都市が、吉田初三郎らの鳥瞰図においてどのように描かれたのかを紹介する。直接対象とされているのは、世界的な軍縮の流れの中で要港部に格下げされたばかりの舞鶴を描いたものである。第4章の後のコラム（柴田陽一執筆）は、日露戦争後に日本の租借地となった関東州の旅順軍港についてのものである。少なくとも地理学関係の文献では従来とりあげられたことのないテーマと思われ、評者も教えられ点が多かった。所蔵機関がかなり限られていると思われる大縮尺図が数点掲載されている（縮小率の関係で判読困難な部分があるのは惜しまれるが）

のも貴重である。ただ、図版が多いとはいえ11頁にも及ぶこのコラムは、コラムの枠を大幅に超えているということも指摘しておくべきであろう。

第II部と第III部に収められる6つの章は、軍港都市の諸事象を対象とすることについては共通するものの、それらの内容は執筆者の関心をより直接的に反映し、多様である。いわば「特論」と称すべきものである。まず第II部「景観に刻まれた軍港都市の諸様相」冒頭の第6章「明治後期から大正期にかけての海軍志願兵志願者の出身地」（花岡執筆）は、海軍志願兵の出身地の分布を、『海軍省医務報告』（国立国会図書館デジタルライブラリーで公開）という、おそらくこれまで地理学分野では用いられることのなかった資料を用いて、時系列的に分析している。近代日本における地域構造の形成過程ともかかわる興味深い論考ではあるが、ここで用いられている計量的分析手法は、評者の理解能力を越えるものであり、論文全体についての論評は差し控えたい。ただ、正直な感想を言えば、「景観」という本書全体を通じるキーワードからは、かなりの距離を感じざるをえない。

第7章「大正軍縮期前後の中舞鶴・新舞鶴—人口を中心とする比較分析—」（山神執筆）は、舞鶴軍港建設時に、その敷地を挟んで西と東にそれぞれ計画的に造成された2つの市街地（名称は時代により一定ではないが、本章では西に位置するものを中舞鶴、東に位置するものを新舞鶴として）をとりあげ、両集落の性格の違いを、主として大正9（1920）年以後5年おきに行われた国勢調査のデータを用いて解明しようとしたものである。結論として、ほぼ純粋に海軍関係者の集落としての性格を有した中舞鶴と、商業者なども多く、複合的な市街地を形成していた新舞鶴という相違点を明らかにしているのは十分納得のいく結論である。

第8章「軍港都市の遊興空間」（加藤政洋執筆）は、軍港都市における遊郭について論じる。近代の日本では合法的であった遊郭は、軍港都市に限らず、ある程度以上の規模をもつ都市には必ずといってよいほど存在したものであったが、軍事都市や重工業都市など青年男子の多い都市でとりわけ重要な意味を有したことも、ここで評者が改めて指摘するまでもない衆知の事実である。加藤は

すでにこのテーマについて数冊の著書を著しており⁴⁾、扱いなれたテーマということもあってか、各軍港都市の遊郭について手際よく概観している。階級組織である軍隊の性格を反映して、遊興の場も階級によって異なっていたとの記述は興味深い。

第Ⅱ部では、すべての章の後にコラムが置かれ、いずれも直前の章の執筆者の担当である。第6章の後のコラムは、国土数値情報を基に作成したデジタル地図が軍港都市の景観分析に役立つことを、横須賀の事例に即して紹介している。巻頭の口絵に掲載されたカラー図版と一体をなすものであり、第6章の内容とリンクしているわけではない。第7章の後のコラムは、舞鶴に今日残る近代化遺産について紹介したものである。第7章の本文が統計分析によるのに対し、コラムの方はむしろ景観が直接扱われている。第8章の後のコラムは、1935（昭和10）年に刊行された『呉花街案内』の記載内容をやや詳しく紹介することによって、当時の呉の遊郭の実態に迫る。第8章の内容と直結するものである。

以上の第Ⅱ部に収録された論文が旧日本海軍時代の諸事象を直接扱っているのに対し、最後の第Ⅲ部「軍港都市の景観の行方」に収録された3つの論文は、第二次大戦後（現時点を含む）の軍港都市の景観にかかわるものである点が異なっている。まず第9章「戦後佐世保市における「米軍」の景観－佐世保川周辺の変容－」（山本執筆）⁵⁾は、敗戦後、日本海軍に代わって佐世保軍港を使用することとなったアメリカ海軍の佐世保における存在のあり方について時間軸のなかでおさえるとともに、とくにベトナム戦争さなかの1967（昭和42）年に起こった原子力空母エンタープライズ寄港に対する反対運動をめぐる地域住民の対米軍基地観の動きについて考察を加えている。本章で山本がとりあげるテーマは大変重い。中でもエンタープライズ寄港反対運動と、それを抑えようとする警備当局の動きについて記した部分は、読者がそのどちらの立場に立つのか、ひいては、佐世保におけるアメリカ海軍の存在とそれを根拠づけている日米安保体制を是とするのか否かを厳しく問いかけているように読みとれる。ただ、評者のこのような印象は、この出来事を同時代人として－ただし傍観者として－過ごした者の偏見なのか

もしれないが。

第10章「軍港都市における景観保全に対する住民の意識調査」（村中執筆）は、村中がこれまで取り組んできた住民の環境評価に関する研究を、呉における景観保全の動きに対して展開したものである。「景観を守るために住民出資のファンドが作られることになったと仮定して、あなたはいくらくらいなら支出しますか？」という問いを呉旧市内の各地区の住民に郵送法によるアンケート調査で尋ね、その結果を計量分析している。調査対象者にやや唐突感を与えたのであろうか、回収率が10%台とかなり低かったのは惜まれる。

最後の第11章「軍港都市の住景観－不動産広告にみる横須賀の場所イメージ」（埴淵知哉執筆）は、過去数十年の朝日新聞に掲載された横須賀の不動産広告を資料として、住宅地としての横須賀のイメージがどのように表現されてきたのかについて考察する。それらの広告において、米軍基地や自衛隊の存在が（おそらく意図的に）消されてきたことは容易に理解されるところであるが、かつては「横須賀」という地名そのものさえ忌避され、「湘南」に置き換えられていたのが、1990年代以降は「横須賀」もかなり広告の中にみられるようになってきた、との指摘は興味深い。ただ埴淵自身が記す（399頁）ように、本章が目するのは横須賀の「住景観そのもの」ではなく、「住景観イメージ」である。その意味で、むしろ副題の方が本章の内容をよりの確に表現している。

第Ⅲ部の3つの章の後にもコラムが付随している。第9章に続くコラム（山本執筆）は、2010（平成22）年に開通した佐々佐世保道路（西九州自動車道の一部）の建設に伴って、旧軍港区域（現在もアメリカ海軍と海上自衛隊がほとんどを使用）に新たな変化が生じていることを述べたものである。まさに現在進行形の事象を扱っている。第10章の後のコラム（村中執筆）は、第10章で村中がとった方法とはやや異なるものの、同じく環境経済学的手法を用いることによって、軍港都市呉のもつ観光資源としての価値を明らかにできるとしている。第11章の後のコラム（筒井執筆）は、旧軍用地の一部が公園として転用された事例を、横須賀と佐世保をフィールドとして、空中写真と地上写真を併用しながら紹介している。

以上、本書の個々の章とコラムについて、それ

らの内容と感想を簡単に記した。本書全体を通じての印象は、今日の日本における人文地理学分野での軍港都市研究の到達点を見事に示すものというところである。さらに言えば、編者の上杉をはじめ、本書の執筆者がいずれも30歳代から40歳代前半という中堅・若手で占められていることに、賞讃の言葉を贈りたい。この点については、あるいは「この世代だからこそ、このようなテーマにしがらみなく取り組めた」との考え方も成り立つかもしれないが、そのことは上に記した評者の賞讃を割り引くものではない。

ただ、この書評を賞讃のみで終わらせることは、学術雑誌における書評のあり方として適切ではなからう。そこで最後に、評者が本書について感じた多少の疑問点を記すこととしよう。

すでに記したように、本書の第Ⅱ部・第Ⅲ部に収録された章やコラムの中には、「景観」というキーワードから相当かけ離れたものや、今日まさに進行中の現代的な事象をとりあげたものがいくつ含まれている。本書が『軍港都市の(人文)地理学的研究』というタイトルであったならば、こうしたことは長所でこそあれ、問題点とはなりえない。ただ、「軍港都市史」シリーズの中の「景観編」であるという事実を考えると、本書の内容はいささかその枠を超えているのではないか。

歴史学畑のシリーズの中の1冊であることと関係するのであろうか、本書はA5判という判型で刊行された。そのため、1頁に収録できる図版の大きさが厳しく制限される結果となった。版面裁ち落としというような対策もとられていない。第Ⅰ部の諸章でより大縮尺の地形図が用いられなかったことには、あるいはこうした事情が関係しているのかもしれない。大変惜しまれることである。また、これは出版社あるいは印刷所の責に帰すべきことかもしれないが、本書において重要な役割を果たすべき地形図の印刷が、必ずしも鮮明なものばかりでないことも、指摘しておかなければならない。編集・印刷工程にコンピュータが用いられるようになってから、校正刷の段階ではきれいに仕上がっているように見えたのに、完成してみると物足りないということをしばしば経験するが、本書の図版の一部にみられる不鮮明さも、あるいはこうした事情によるものであろうか。

また、文字通り「ないものねだり」であることを承知で言えば、コラムとはいえ旅順がとりあげられているのであるから、台湾澎湖島の馬公や朝鮮半島東南部の鎮海についても、多少の言及があつてよかつたのではないか。

アート紙の口絵4頁を含んで460頁余に達する本書のことであるから、個人で購入し、座右に置いて全体を通読するにはやや抵抗感のある価格となっているのもやむを得ないことであろう。ただ、軍港都市のさまざまな側面を多角的に取り扱った本書は、きわめて多方面の読者にとって興味深い内容を含んでいることは間違いなく、図書館や研究室には是非1冊備えていただくことを期待したい。

(山田 誠)

〔注〕

- 1) ①平岡昭利編著『地図でみる佐世保』芸文堂、1997が代表的なものであろう。また評者もかつて、東舞鶴と横須賀について、それぞれ小文を公にしたことがある。②山田 誠「今に生きる近代都市—舞鶴市東地区の場合—」都市研究1、2001、63-71頁、③山田 誠「近代日本の都市形成—鉱工業都市と軍事都市の事例—」(秋山元秀ほか編『アジアの歴史地理Ⅱ 都市と農地景観』朝倉書店、2008)160-175頁。なお、本書の執筆者の一人である山本は、本書刊行後に単著として、④山本理佳『「近代化遺産」にみる国家と地域の関係性』古今書院、2013を著している(本誌55巻4号に三木理史による書評が掲載されている)。
- 2) 前掲1) ③。
- 3) 呉市史編さん室編『呉・震災と復興：旧軍港市転換法から平和産業港湾都市へ』呉市、1997所収の付図「呉市街地復元図(昭和16年当時)」。
- 4) 加藤政洋『花街—異空間の都市史—』朝日新聞社、2005ほか。
- 5) この章は、既発表の論文2編を再構成したものであり、また前掲1) ④にも転載されている。